慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	飯田鼎君学位授与報告
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.12 (1966. 12) ,p.1493(129)- 1497(133)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661201-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋亀吉」、「最近の堀江理論」、「研究文献」というように問題を整理しているのも興味深い。以上、簡単にその内容について紹介を試みたが、要するに本書は、研究動向と問題点の整理とならんで、これに必要な主要な文献とを配列したきわめて詳細な文献的研究である。経済史、社会史にかんするすべての研究者が、一本備えておいても無駄ではない。きわめて便利な書物である。（広文社・昭和四一年六月刊・A5・六四八頁・一八〇〇円）

—飯田　鼎—

＊　＊　＊

鈴木諒一著

『くらしの中の物価』

最近物価問題はやかましく論ぜられ、学生の中にもこの問題をとりあげる人が多い。本書はこの問題についてできるだけ平易に、家庭の主婦と経済学者との対話という形で述べられている。四章からなるが（これを第一夜、第二夜というように書かれている）、一、家計の内容はどうしてきまるか、二、物価はどうなる、三、物価と賃金、四、物価指数とは、と分れている。結びのことばから若干引用してみると、中期経済計画によると、物価上昇の原因として、㈠、労働力不足による賃金の上昇が、生産性の上昇によってカバーされない場合が多いこと、㈡、生産性上昇の高い企業においてその成果が十分価格引下げに反映されず、一部に協定などによって価格競争の原則が貫かれていないこと、㈢、生産財産業には設備近代化のための投資がいまでも行われてきたが、農業、中小企業、流通部門など、消費に関連の深い部門の合理化のための投資が少なかったこと。㈣、消費者の立場から自由化の問題が検討されることが少なく、配慮が足りないこと。㈤、金融機関が預金以上の貸出しを行い、企業も借入れ金によって経営をしている場合が多く、このために出ていった資金がインフレの要因になっていること、このような事実認識に対して、その対策が考えられるが、結局成長率を下げることによって物価上昇をおさえようと考える。しかしそうすれば不景気になることは避けられない。そこで極端な不景気を起こさずに、しかも消費者物価を上げずにすむような妙案があるとすれば、それは貯蓄をふやすということである。貯蓄することこそ物価を安定させる道といえる。それでは貯蓄をふやすにはどうすればよいかというと、下がった株価を正常な状態に戻すこと。貯蓄に対する税制上の優遇措置等が考えられる。これは一見高額所得者だけを優遇するように見えるが、物価上昇が鈍化すれば恩恵は一般国民に及ぶことになる。このような論旨に反対の意見もでてこようが、著書の豊富な経済学の知識をもって平易に説かれた本書は広く読まれてよいものと考えられる。（東洋経済新報社・昭和四〇年七月刊・B6・二一〇頁・三九〇円）

—佐藤　保—

飯田鼎君学位授与報告

報告番号　乙第一七九号
学位の種類　経済学博士
授与の年月日　昭和四一年一〇月五日
学位論文題名　「マルクス主義における革命と改良」

内容の要旨

「マルクス主義における革命と改良
——第一インターナショナルにおける
階級・体制および民族の問題」一九六六年　飯田　鼎

本論文は一八六四年ロンドンにおいて創立された第一インターナショナル（国際労働者協会）におけるマルクスおよびエンゲルスの活動を通してマルクス主義の革命理論の特徴を明らかにしたものである。

この論文の中心的課題は、一八四八年の革命の時点から一八六〇年代に至るマルクス主義の革命理論の深化を、革命的視点と改良的視点の統一的把握と観点から追求するとともに、その革命理論の本質を労働者階級の闘争を媒介とする社会主義運動と民族開放闘争との関連において、弁証法的な理解としてとらえ、それがいかにして形成されたかを歴史的に且つ理論的に明らかにしたものである。つぎのような内容から成る。

序　章　一九世紀ヨーロッパ労働運動におけるマルクス主義の役割——問題の設定
第一章　一八四八年の革命における労働者階級とマルクス主義の形成
第二章　インターナショナルへの途
第三章　第一インターナショナルの成立
第四章　インターナショナルの展開——その発展と矛盾
終　章　残された問題——修正主義との闘い

審査報告要旨

本書は、一八四〇年代から一八八〇年代に及ぶマルクスおよびエンゲルスの活動において、彼らの革命観が、イギリスを中心とするヨーロッパ労働運動の展開の過程を背景にしてどのように具体化され、発展せしめられたか、経済学者あるいは哲学者としてのマルクスとエンゲルスよりはむしろ、革命家としての彼らの苦闘と前進、しかもそのなかでのその革命理論の陶冶の問題に焦点をしぼったものである。それゆえ著者は、「はしがき」のなかでつぎのように強調している。「それゆえ、マルクスの革命理論の本質的理解こそ、わたくしが本書において試みたものであって、マルクス主義の革命理論の精髄を、マルクスとエンゲルスという二人の巨匠の行動を通

じて正しく把握しようとした。その場合、わたくしは、従来、ともすれば多くのマルクス批判の書に見出されるような俗流的見解を排除する一方、マルクスの革命理論を、ただ最初から矛盾のないものとして教条化することも非科学的なものとして批判する態度を一貫して堅持しようとしたつもりである」。

序章においては、著者は、マルクスの革命理論の発展の素描を試みており、階級的視点を媒介（項）とする体制的視点と民族的視点との統一的理解および革命的視角と改良的視角との弁証法的な把握の体系化が、一八四八年の革命、一八六四年の第一インターナショナル、および一八七〇年代の末期のそれぞれの時期において、どのように段階的に発展せしめられていったかを明らかにし、問題を提起している（これは従って全体のごく大まかなスケッチというべきである）。

「第一章　一八四八年の革命における労働者階級とマルクス主義の形成」においては、第一に、イギリス労働者階級の運動、とくにチャーティスト運動が、マルクスおよびエンゲルスに、いかに深刻な影響をあたえたか、レーニンのいわゆる「マルクス主義の三つの構成部分」のひとつとしてのイギリスの古典派経済学の科学としての成立の背後におけるイギリスの労働運動の、プロレタリアートの運動としての認識が、革命的民主主義者から革命的共産主義者への推移を可能にしたのであって、彼らの「共産党宣言」、およびエンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状態」には、まさしく、イギリス労働運動の彼らにたいする鮮烈な衝撃が見出され指摘されている。

第二には、著者はマルクスとエンゲルスが、イギリスとならんでドイツの労働者階級の運動をいかに評価したかを問題にしている。その階級意識の未成熟の強調との関係、その両者の矛盾の理由が説明されている。この時期、すなわち（労働運動の発現形態としての自然発生性と目的意識性との関係を把握するとともに）、一八四八年の革命の渦中において、マルクスとエンゲルスは、発展するイギリス労働運動を媒介として、革命の問題とならんで部分的改良の問題に関心をもち、この両者を統一的に把握しようとする努力がはじまることを指摘している。

第二章においては、一八四八年の革命以後、五〇年代における資本主義の新たな段階のもとにおける労働運動の展開――とくに後期チャーティストによって担われたのだが――とそのなかでのインターナショナルへの志向がのべられている。一八四八年以前のマルクスとエンゲルスにとっては、労働運動の問題は革命の問題であったが、五〇年代においては、ブルジョア的な生産様式の発展と支配とともに、労働運動の方式としてさまざまな議会主義的・民主的な方法――たとえば普通選挙権など――がとられるに至り、「革命」とならんで「社会改良」の問題が、戦術的に重要な意味をもってくる。またそれとともに、資本主義発展の不均等法則の結果として、ブルジョア的な民主主義的な運動とならんで、民族主義運動が活潑となり、労働者階級運動の国際化方向とならんで、被圧迫民族の解放運動が社会主義運動とならんで重要な地位をしめるようになる。

かくして、労働組合を中核とする階級的運動、体制変革をめざす社会主義運動、そしてさらに被圧迫民族の解放闘争が、相互に不可分なものとして、ヨーロッパの労働者階級運動の重要な環をなすに至った。マルクスとエンゲルスは、この過程を通じて、革命と改良との関係、階級的視点を媒体として、体制と民族の問題を統一的・弁証法的に把握するに至り、彼らの革命観は、一八四八年の革命以前よりもはるかに雄大にして且つ科学的なものになる過程が追求されている。とくに、マルクスのポーランド問題への関心はまさにこの時期にはじまったことは、その「ポーランド手稿」からも明らかであり、一八六三年のポーランド人民の蜂起にたいするヨーロッパの人民の支援の運動を通じてのインターナショナリズムの精神の昂まりがのべられている。ポーランドの独立運動を中心とするヨーロッパの民主民族主義運動を、とくに反動的なプロイセンおよび帝政ロシアの政策との関連のなかで追求し、労働者階級の第一インターナショナルへの志向を分析している。

「第三章　第一インターナショナルの成立」では、インターナショナルの成立に導いた基本的な諸契機、すなわちアメリカ南北戦争、一八六二年の万国博覧会および一八六三年のポーランド人民の独立闘争について説明し、これらが、発展したイギリス労働組合運動を中心として、労働者階級の国際的連帯の機構をつくりあげるのに貢献した過程と、このような状勢の中でのマルクスおよびエンゲルスの労働運動の理論における前進と活動とを、革命と改良との弁証法的把握という観点から説明している。この場合、著者は、改良というものを、資本主義の発展にともなう労働者階級の組織状態の変化とともに革命の達成のために利用しうるさまざまな政治的経済的な合法手段の総体を意味するものとして説明している。従ってその場合、イギリスの労働組合運動の動向にかなり注目していることが注目されるであろう。

「第四章　インターナショナルの展開――その発展と矛盾」においては、一八六四年の創立総会から、六五年のロンドン会議、一八六六年のジュネーヴ大会、六七年のローザンヌ大会、六八年のブリュッセル大会、六九年のバーゼル大会、そして普仏戦争を経てこれにつづくパリ・コンミューンの過程において、階級・体制および民族の問題はどのようにしてあらわれたか、これらの大会におけるさまざまな問題点についてふれながら、そのなかでマルクスとエンゲルスがそれらをどのように統一的に把握しようとしたかがのべられている。とくに、インターナショナルにおいて圧倒的な影響力をもっていたイギリス労働組合主義者――G・オッジァーを中心とする――の改良主義、革命と改良との弁証法的把握ではなく、改良主義そのものに反対するとともに、一切の部分的改良の手段を否定して、革命至上主義に走ろうとするアナーキストに決定的に対立せざるをえなかった点を強調している。著者はまた、ナショナリズムとインターナショナリズムとの関係、それらの相互の矛盾を象徴するものとしてのインターナショナルとドイツ労働運動との矛盾についてものべているが、この部分は、インターナショナルを支えたところのものとして、ドイツ労働運動の貢献がいかに少なかったかを明

らかにしている。

著者はまた、パリ・コンミューンについてのマルクスとエンゲルスの評価を、主として彼らの著作を通じて紹介しているのであるが、さらにつぎのような独自の見解を展開する。

㈠世界史上、最初のプロレタリアートの政権といわれるパリ・コンミューン政府は、多分に、民主・民族的色彩が濃厚であること、それのみならず、さらにこれをこえて、体制変革を志向する社会主義的要素をもち、階級・体制および民族の問題の全体的把握の上で闘われたものであること。

㈡その意味では、一九三〇年代のフランス人民戦線と類似性があること。

㈢戦術・戦略の問題としては、全国にわたる革命的状勢の欠如している状態のもとでは、社会主義革命は成功しえないこと。

要するに著者は、パリ・コンミューンの意義を、階級・体制および民族の問題の統一的把握の上に立って、マルクスとエンゲルスがとらえようとしたことを明らかにしている。

最後に、インターナショナルの矛盾についてふれ、コンミューン以後のヨーロッパ労働運動において、その指導権を争うマルクス主義とバクーニンの無政府主義との対立の原因を明らかにし、無政府主義の労働運動における自然発生性の重視、インターナショナルの組織原則としての権力集中性に対するバクーニンの反対が、どのような理論的根拠にもとづくものであるかを説明している。すなわち著者は、マルクスとエンゲルスの理論的立場が、共産党宣言から発

し、第一インターナショナルの過程をへて確立された革命と改良との有機的な関連の把握、そしてさらに階級的視点を媒介とする体制と民族の問題の全体的・統一的な理解に立つものとして、バクーニン主義の立場との基本的矛盾の原因を追求し、マルクス主義の理論的な正しさを強調している。本書の前半は、どちらかといえば理論的であり、後半は、分析的な手法を用いながらも記述的な方法に主力がおかれており、全体としてやや不統一の感じがまぬがれ難いが、問題点を要約すれば、大体以上のようである。

これまで、わが国では、マルクスの革命思想の発展に関する系統的な研究は極めて少ない。この点において本研究は誠にユニークな試みであり、今後、この方面への道をひらいたものといえよう。

それだけに本研究には幾多の疑問点が見いだされる。

まず、本研究の核心たるマルクスの革命理論についてであるが、著者は本研究の「はしがき」の中で、「マルクスの革命理論の本質的理解こそ、わたくしが、本書において試みたものであって、マルクスの革命理論の精髄をマルクスとエンゲルスという二人の巨匠の行動を通じて正しく把握しようとした」と特に強調しているが、実際において、著者はただマルクス・エンゲルスの初期以来の著作の中に散在的に表明された革命的思想の発展の跡を年代的に追求することにとどまって、その前提となるべき「革命理論の本質的理解」を全体としてどこにも述べてはいない。マルクスは革命・改良の概念の下に一体何を理解していたか、これについて著者の充分な説明がない。

マルクスは何よりもまず革命家であったとエンゲルスを初めとして、多くの人々が評しているように、革命理論はマルクス理論体系の核心であって、社会学的には唯物史観、経済学的には剰余価値論、政治学的には国家論と有機的に結合しており、その統一的把握の上に初めて彼の革命理論は正しく理解することができるのである。しかるに本研究には、このような作業は行われていない。この事実は軽視できない。

次に第一インターナショナルに関する部分についてであるが、ここにも若干の疑問点が見いだされる。

第一に指摘したいのは、基本的史料の渉猟が周到とは言えない。重要な史料の見落しが見られる。

第二、史料の使用に著しいアンバランスが見受けられる。マルクス側の史料に偏して、マルクスの対立者側のそれが充分顧慮されていない。マルクスにとっての、マルクスの側からみられたラサール・バクーニンにとどまっている。その限りでは客観性に欠けている。

次に本研究で採られた二つの観点について疑問を述べたい。

その一つは本書の主題にあるように、階級、民族、体制という観点である。第一の革命と改良という観点についてみると、革命と改良という表現は必ずしも適当ではない。著者によれば、マルクスの革命の方法としての革命と改良とは、労働者階級における自然発生性と目的意識性、組織性との統一の立場から把握さるべきである。とすれば改良は革命のための準備段階として結局、革命のうちへ包摂されているのではないか。従ってこの二つを対置するのは適当でないであろう。革命と対置される改良はその後の改良主義（修正主義）における改良を連想するおそれがあるからである。

第二の観点について特に注目されるのは、階級と民族との問題であるが、初期における民族解放論争の前提としてのプロレタリア革命という見解が一八四八年の革命、ポーランド問題への関心を媒介としてされ、代って、プロレタリア革命の前提としての民族解放闘争の意義が認識されてゆく過程が解明されている。だがわれわれにとって興味ある点は、この二つの観点の交差・交錯の統一的解明であるが、これについての追求は本書中に行われていない。

このようにいくつかの問題はあるにしても、本書は我が国で初めて、マルクスの革命思想の発展を相当豊富な文献を利用して、体系的に展開した貴重な労作であり、その苦心と努力は極めて高く評価さるべきであって、今後の研究に大きな期待がもたれる。よって本研究は経済学博士の学位をうけるに充分値するものと思う。

論文審査担当者　主査　平井　新
　　副査　遊部久蔵
　　川田　寿

試験の結果の要旨

右、学位申請に関連し、過去における同君の業績を検討いたした結果、大学院博士課程の終了者と同等以上の学識を有するものと確認いたします。

試験担当者　島崎隆夫
　　寺尾琢磨